

盛久

結崎十郎作

世阿弥作とも

シテ 主馬盛久

ワキ 土屋三郎

ワキヅレ 太刀取

地は 京都より鎌倉に至る

季は 春

シテ詞 「如何に土屋殿に申すべき事の候。

ワキ詞 「何事にて候ふぞ。

シテ 「唯今関東に下りなば。是が限りなるべし。清水の方へ輿を立て、賜はり候へ。

ワキ 「それこそ易き御事。如何に面々。東山の方へ輿を立てられ候へ。

シテサシ 「南無や大慈大悲の観世音さしも草。さしも畏き誓ひの末。一称一念猶頼みあり。ましてや多年値遇

の御結縁空しからんや。あら御名残惜しや。いつか又清水寺の花盛。

地 「帰る春なき名残かな。

シテ 「音に立てぬも音羽山。

地 「滝つ心を人知らじ。

シテサシ 「見渡せば柳桜をこき交せて。錦と見ゆる故郷の空。地 「又いつかはと思出の。限りなるべき東路に。思ひ

立つこそ名残なれ。

シテ「我なまじひに弓馬の家に生れ。世上に隠れなき身とて。」

地「思はざる外の旅行の道。関の東に趣けば。跡白河を行く波の。いつ帰るべき旅ならん。」

下歌「こゝは誰をか松坂や。四の宮河原四の辻。」

上歌「是や此。行くも帰るも別れては。く。知るも知らぬも。逢坂の関守も。今の我をばよも留めじ。勢田の長橋うち渡り。立ち寄る影は鏡山。さのみ

年経ぬ身なれども。衰へは老曾の。森を過ぐるや美濃尾張。熱田の浦の夕汐の。道をば波に隠されて。廻れば野辺に鳴海潟。又八橋や高師山。く。

ロンギ地「汐見坂橋本の。浜名の橋を打ち渡り。」

シテ「旅衣。かく来て見んと思ひきや。命なりけり。小夜の中山は是かとよ。」

地「変はる淵瀬の大井川。過ぎ行く波も宇津の山。」

シテ「越えても関に清見潟。」

地「三保の入海田子の浦。打ち出で、見れば真白なる。

雪の富士の嶺箱根山。猶明け行くや星月夜。早鎌
倉に着きにけり。く。

シテサシ

「夢中に道あつて塵埃を隔つ。実にやそことも知ら
ざりし。山を越え水を渡つて。此関東に着きぬ。
百年の栄花は塵中の夢。一寸の光陰は沙裏の金。
実にや故郷は雲井のよそ。千代もと契りし友人も。
変はる世なれや我一人。鎌倉山の雲霞。実に斯か

る身の習ひかや。

詞

「かくてながらへ諸人に面をさらさんより。天晴疾
う斬らればやと思ひ候。

ワキ詞

「あら痛はしや盛久の独言を仰せ候。如何に申し候。
土屋が参りて候。

シテ詞

「土屋殿と候ふや此方へ御入り候へ。

ワキ詞

「御下向の由を披露申して候へば。急ぎ誅し申せと
の御事にて候。

シテ「唯今も独言に申し、如く。かくてながらへ諸人に面を曝さんよりも。天晴疾う斬られればやとの念願。さては早叶ひて候ふよ。さて最期は唯今にて候ふか。」

ワキ「いや御最期は此曉か。然らずは明夜かと仰せ出だされて候。」

シテ「さては暫くの時刻にて候ふよ。さても此程土屋殿の御芳志。申すも中々愚かなり。又無からん跡一

返の念仏をも御回向に預からば。二世までの御芳志たるべし。我此年月清水の観世音を信じ。毎日彼御経を怠る事なし。さりながら今日はいまだ読誦申さず候ふ程に。御暇を賜はり候へ。彼御経を読誦申したく候。

ワキ「それこそ有難う候へ。土屋も是にて聴聞申さうずるにて候。」

シテ「有難や大慈大悲は薩埵の悲願。定業亦能転は菩薩

の直道とかや。願はくは無縁の慈悲を垂れ。我を
引導し給へ。今生の利益もし欠けば。後生善所を
も誰か頼まん。二世の願望もし空しくは。大聖の
誓約豈虚妄にあらずや。或遭王難苦臨刑欲寿終。
念彼觀音力刀尋段々壞。

ワキ詞

「有難や此御経を聴聞申せば。御命も頼もうこそ
候へ。」

シテ詞

「実によく御聴聞候ふ物かな。此文と謂つば。たと

ひ人王難の災に逢ふといふとも。その劍段々に折
れ。」

ワキ

「又衆怨悉退散といふ文は。射る矢も其身に立つま
じければ。」

シテ

「実に頼もしや去りながら。全く命の為に此文を
誦するにあらず。」

二人

「種々諸惡趣地獄鬼畜生。生老病死苦以漸悉令滅。」

地

「此文の如くは。諸の惡趣をも。三惡道は遁るべし

や。有難しと夕露の。命は惜しまず。唯後生こそ
は悲しけれ。

地

「昔在靈山の。御名は法華一仏。今西方の主又。娑
婆示現し給ひて。我等が為めの觀世音。三世の利
益同じくは。かく刑戮に近き身の。誓ひにいかで
洩るべきや。盛久が終の道。よも闇からじ頼もし
や。

シテ詞

「あら不思議や。少し睡眠の内に。新なる靈夢を蒙

りて候ふは如何に。あら有難や候。

ワキ

「既に八声の鶏鳴いて。御最期の時節唯今なり。早々
御出で候へとよ。

シテ詞

「待ち設けたる事なれば。左には金泥の御経。右に
は思ひの珠の緒の。命も今を限りなれば。是ぞ此
世を門出の庭に。足よわくと立ち出づる。

ワキ

「武士前後を囲みつゝ。是ぞ別れの鶏の声。

シテ

「鐘も聞ふる東雲に。

ワキ 「籠より籠の輿に乗せ。

シテ 「由比の汀に。

ワキ 「急ぎけり。

地 「夢路を出づる曙や。く。後の世の門出なるらん。

ワキ 「さて由井の汀に着きしかば。座敷を定め敷皮しかせ。早々直らせ給ふべし。

シテ詞 「盛久やがて座に直り。清水の方は其方ぞと。西に向ひて観音の。御名を称へて待ちければ。

太刀取

「太刀取後にまはりつゝ。称念の声の下よりも。太刀振り上ぐればこは如何に。御経の光り眼に塞がり。取り落したる太刀を見れば。二つに折れて段々となる。こはそも如何なる事やらん。

シテ 「盛久も思ひの外なれば。唯茫然とあきれ居たり。

ワキ 「いやいや何をか疑ふべき。此程読誦の御経の文。

シテ 「臨刑欲寿終。

ワキ 「念彼観音力。

シテ「刀尋。

ワキ「段々壞の。

地「經文新に曇りなき。劍段々に折れにけり。末世にては無かりけり。あら有難の御經や。やがて此由聞し召し。急ぎ御前に参れとの。御使度々に重なれば。召に随ひ盛久は。鎌倉殿に参りけり。く。

ワキ詞「如何に盛久御前にて候。君此曉不思議なる御靈夢の御告あり。盛久も若し夢や見けるとの御事にて

候。

シテ詞「何をか隠し申すべき。今夜不思議の御靈夢を蒙りて候。

ワキ「さらば其靈夢の様を御前にて真直に申し上げられ候へ。

シテ「畏つて候。

シテクリ「それ不就正覺の御誓ひ。今以て始めならず。

地「過去久遠の大悲の光り。何く不到の所ならん。

シテサシ
「然るに我此光陰を頼み。

地
「日夜朝暮に怠らず。彼御経を修読せしに。取り分
き此時節刑戮に近き身を思つて。片時怠る事もな
く。

シテ
「初夜より後夜の一点まで。

地
「蕭然として座したりしに。

クセ
「六窓いまだ明けざるに。耿然たる一天。虚明なる
内に思はずも。八旬にたけ給ひぬと。見えさせ給

ふ老僧の。香染の袈裟を懸け。水晶の数珠を爪ぐ
り。鳩の杖にすがりつゝ。妙聞たゞしき御声にて。
我は洛陽東山の。清水のあたりより。汝が為めに
来りたり。本より大慈大悲の。誓願などか空し
からん。唯一音なりとても。我を念ずる時節の。
王難の災は遁るべし。

シテ
「況んや汝年月。

地
「多年の誠を抽んでゝ。発心人に越えたり。心安く

思ふべし。我汝が命に。代はるべしと宣ひて。夢
は即ち覚めにけり。盛久貴く思ひて。歡喜の心限
りなし。

ロンギ地

「頼朝是を聞き召し。此暁の御夢想も。同じ告ぞ
と新なる。御信感は限りなし。

シテ

「其時盛久は。夢の覚めたる心地して。感涙をとめ
かね。御前を罷り立ちければ。

地

「如何に盛久暫しとて。御簾を上げて召さるれば。

シテ

「せんかたもなき盛久が。

地

「命は千秋万歳の。春を祝ふぞと。御盃を下さるれ
ば。

シテ

「種は千代ぞと菊の酒。

地

「花を受けたる袂かな。

ワキ詞

「如何に盛久。盛久は平家譜代の侍武略の達者。殊
には乱舞堪能の由聞き召し及ばれたり。一年小松
殿。北山にて茸狩の遊路の御酒宴に於て。主馬の

盛久一曲一奏の事。関東までも隠れなし。殊更是
は悦びの折なれば。唯一指との御所望なり急いで
仕り候へ。

シテ詞

「有難しく得がたきは時。去りがたきは貴命な
り。盛久かゝる時節に逢ふ事。世以てためし有る
べからず。治まり靡く時なれや。一天四海の内の
みか。人の国まで日の本の。唐が原も此所。（男舞）
酒宴半の春の興。く。曇らぬ日影のどかにて。

地

君を祝ふ千秋の。鶴が岡の松の葉の。散り失せず
して正木のかづら。

シテ

「長居は恐れあり。

地

「長居は恐れありと。罷り申し仕り。退出しける
盛久が。心の内ぞゆゝしき。く。